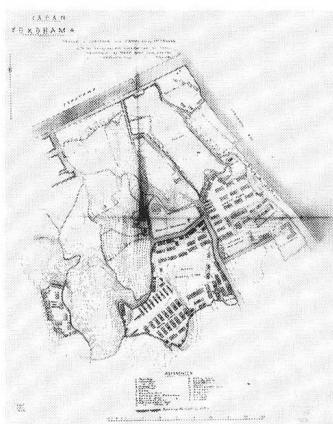


(①) 開兵場に整列する第10連隊第1大隊(LLM所蔵)



(②) 山手駐屯地図(PRO所蔵)1865年

海外資料の最初のヒントをご教示下さったのは、東京大学史料編纂所の宮地正人氏である。その資料が①の写真で、これは時期横浜警備にきていた八王子千人同心の存在を知り、その調査と資料収集に力を入れた。

時代横浜警備にきていた八王子千人同心の存在を知り、その調査と資料収集に力を入れた。また、同業に置くことにした。また、同

瑞代氏にお願いして、これを手掛かりにイギリスの資料探索の旅に出でもらうこととした。①の写真は、ロンドン北方のリンクシャー・ライフ・ミュージアムが保管する元駐屯軍兵士ラング氏旧蔵の写真帖の中にあつた。諸機関の協力もあって、この他いろいろな資料が発見された。連隊司令部や付属の資料館などには、除隊した将兵から、手記や日記、アルバムなどが寄贈・保管されていたのである。

ランカッシャーの第二〇連隊第二大隊、ハンプシャーの第六七連隊、デボンシャーの第一連隊、ダービーシャーの第一連隊、ノーザン・ヨークシャーの第一連隊、リバプルの第一連隊、リバプルの第一〇連隊第一大隊(来日順)に関する資料が、入手と同時に大山氏から次々と送られてきた。英語に堪能な大山氏の骨身を惜しまぬ調査のおかげで、横浜に駐屯していた各連隊の調査と資

開港のひざば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 T231 電話(045)201-2100
発行日/平成4年1月29日
印 刷/有三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第020055号 類別・分類C-B E160

トランテ山とフランス山』展

料収集が終了したのは、約一年のことである。
我々は、連隊名と駐屯期間を書き込んだ一覧表を片手に、諸資料を幕末維新时期の歴史の中に落とす作業を続けた。その際、軍司令部が置かれた香港や上海など東アジア全体の中で駐屯軍を考察することを心掛けた。我々の作業にめどがついたのは、昨年末のことである。

この間、筑波大学の泉田英雄氏のご好意により、最も早い時期の山手の駐屯地図(写真②)を入手することができた。これは、現在イギリス国立公文書館(PRO)に所蔵されている。

またフランスに関しては、五年前から桐朋学園大学短期大学部の中山裕史氏に調査をお願いし、外務省文書や海軍省文書の悉皆調査が続けられた。そして、着色のフランス軍陣営地図などが発見された。

この数年を振り返ってみると、基礎資料の収集に走りまわった感を深くするが、全ての収集が終了したわけではない。とりあえず、収集した諸記録や駐屯軍関係の新聞記事などを編集し、資料集として近く出版する予定である。今回の展示が、多くの方々の見えざる手に支えられたことを心から感謝する。

『トワント山とフランス山』展に寄せて

杉山伸也氏に聞く

— 外交面は本来、外務省の所管です

よね。

— 一月二十九日からの横浜開港資料館企画展示『トワント山とフランス山』展にちなみ、グラバー研究など多くの著作を発表されている慶應大学教授の杉山伸也さんをお招きして、十九世紀のイギリスの東アジア政策にまつわるお話を聞いていただきました。

— これまでイギリスの東アジア政策の研究は、主導権を握っていたとされるイギリス外務省の資料を中心に行なわれてきましたが、杉山さんは幕末維新期に限れば、海軍省も同様に重要な地位を占めています。詳しくお話をいただけますか。

杉山 イギリスでは、海軍力を背景とした砲艦外交的なものに対する反省が一八五〇年代の終わり頃から強く出てきますが、六〇年代に財政を担ったグラッドストンの時代になると、もっとはつきりとしてきます。このイギリス国内の財政政策の転換点と、日本の開港の時期が重なっていますが、このことには重要な意味があると思います。また、東アジアでは、イギリスの権益保護という面でみると陸軍よりも海軍のほうが主流となっていますので、海軍の問題を研究する必要が出てくるとということです。

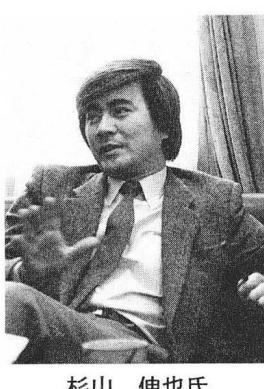
— それでは、どういう理由があるのでしょうか。

杉山 任地へ出るとそこに、親しみを持つにしろ、反感を持つにしろ判断に客観性を持てなくなるということです。事務レベルで政策決定をするため、本

省のグループはずっと本省勤めです。在外公館からの要望などは、本省の人たちの頭をかすめることもほとんどない場合さえあります。ですから、外務省資料として残された在外公館からの要望・報告などを調べるだけでは不十分なのです。

— 開国開港期のイギリスの対日政策の状況はどうだったのでしょうか。

杉山 五〇年代終わりから、六〇年代



杉山 伸也氏

東アジア政策を考える場合は、個別の国との外交関係だけでなく、地域全体でイギリスがどういう政策をとったかということが重要です。つまり東アジアについては、高度な政策決定をする必要がありますので、外務省だけでは決められず、植民地省、海軍省も加わった閣議のレベルの問題になるので、外務省資料だけでは、十分ではありません。また、外務省と言っても本省のグループと在外公館詰めのグループ（外交部門、領事部門）は、はつきりと分かれています。在日公使や領事が本国に要望を出して、そのまま取り上げられるとはかぎりません。

— オールコックは、中国ではどのような政策をとったのでしょうか。

杉山 太平天国運動で清朝政府の基盤が危うくなり、中国の国内政治が動搖

し、イギリスのコマーシャル・インテリストが守れなくなる状況が出てきました。イギリスがどういう政策をとったかというと、基本的には清朝政府を支え、その中で最大限の利益を獲得するという方向に転換する。オールコックは、中国では、日本でとつていて武力による政策とはぜんぜん違った政策をとります。六九年に清朝政府といわれるオールコック協定というのを結びますが、これは一種の妥協政策であつたため、中国在留のイギリス商人からは、ものすごい非難を受けました。この時期は、イギリス国内の政策が変わつたある時で、それがイギリスの軍事力なり、対外政策に反映されています。そして、もちろん個別の国との外交政策にも変化を及ぼしています。

— イギリスの国内政策の変化は、どういった面で言えるのでしょうか。

杉山 初めにも言ったように財政的な面から来る変化です。五〇年代のクリミア戦争から数年というのは、中国でのアロー号事件、太平天国運動、インドでのセボイの乱など、イギリスが武力にたよった世界政策を展開していく時代でしたが、このことが逆にイギリスの財政負担を増大させる結果になります。

— ところで、軍事費の割合はどれくらいになっていたのですか。

杉山 一八五〇年に歳出の二七パーセントだったのが、五五年には四〇パーセント、五七年には四四パーセントにのぼっています。さらにセボイの乱に

より軍事費は一層増大していきます。イギリスにとっては東アジア貿易で、どれだけの商業的利益を引き出せるかということが重要な関心でした。なかでも、中国市場は地域も広く、人口も多いので関心が非常に高かった。しかし、中国に進出していった商人たちが期待していた膨大な中国市場というのは、幻想に過ぎないということに外務省も商務省もかなり早く、六〇年代初めには気がついていたと思います。そして、増大する軍事費に象徴されるようなコストをかけてまでやる意味があるかどうかが問題にされてきます。

——軍事費が増大してきた原因には、どのようなことがあったのでしょうか。
杉山　イギリスとフランスは敵対関係にあつたのですが、ナポレオン戦争でイギリスは勝ったために、かえってディレンマにおちいつてしまつた。それは、十九世紀の半ばには船の構造が帆船から蒸気船へ、木造から鉄造へと大きく変わつてきますが、イギリスは、戦争に勝つたことで十八世紀以来の旧式な木造軍艦が残つてしまつた。それに対して、フランスは、負けたので新型の軍艦を揃えるようになります。イギリスは、老朽船が増え負担が増加した。有事のための投資が必要になってきたのです。

——太平天国運動が一八六四年に終息し、中国大陸も落ち着いていますが、日本でも六二〇六年の攘夷政策による危機が薩英戦争と下関戦争の終結で大体おさまり、六〇年代中期には比較

的平穏な時期が到来します。その時期にイギリスがどういう政策をとつていいのかということを現在考えています。海軍が対外政策の基本的なところで軸になる行動をしていたことはよくわかるのですが、東アジアには陸軍も来ており、それとの関係はどうなつていたのでしょうか。どうも危機の時には、海軍力によりコマーシャル・インテレーストの防衛を行なうが、平時には陸軍が登場してくる傾向にあるように思われます。

杉山　中国の租界を守っていたのは、陸軍力ですね。

——六〇年代の半ばに上陸し、太平天国運動の鎮圧にあたり、引き続き上海租界に駐屯しているのはイギリス陸軍第六七連隊でした。さらに大きな勢力として、香港に司令部を置く第九九連隊も駐屯していました。

杉山　フランスのことについては、あまり詳しくないのでですが、どうだったのでしょうか。

——開国のときにはフランスの影響力はほとんど無く、横浜開港前から違つてきます。フランスも中国市场への進出の希望を持ってはいましたが実現しませんでした。一八五二年にナポレオン三世の第二帝政が始まると、積極的に進出しようとする動きが出てきました。それは、クリミア戦争で勝利し、エズ運河も計画され、喜望峰を回らないでも東方へ向かえるようになると、地理的条件の変化が出てきたこと。

経済的には、この時期、ヨーロッパに

蚕の微粒子病が発生したり、アメリカの南北戦争により綿の輸入ができなくなつたりして、アジアの生糸もインドの綿の直輸入が必要になってきたことになる行動をしていたことはよくわかるのですが、東アジアには陸軍も来ており、それとの関係はどうなつていたのでしょうか。どうも危機の時には、海軍力によりコマーシャル・インテレーストの防衛を行なうが、平時には陸軍が登場してくる傾向にあるように思われます。

——コス

トが上がります。といつても、すぐに東アジアへの進出が始まったわけではありませんでした。一八六〇年代初頭まで、フランス銀行の支店や定期航路という条件が揃わないので、極東に視点は向けられてはいても、具体的な変化はおきていません。

杉山　日本とフランスの関わりが出てくるのはいつごろになりますか。

——一八六三年にリヨンの商人を中心として、香港に司令部を置く第九九連隊も駐屯していました。フランスのことについては、あまり詳しくないのでですが、どうだったのでしょうか。

——開国のときにはフランスの影響力はほとんど無く、横浜開港前から違つてきます。フランスも中国市场への進出の希望を持ってはいましたが実現しませんでした。一八五二年にナポレオン三世の第二帝政が始まると、積極的に進出しようとする動きが出てきました。それは、クリミア戦争で勝利し、エズ運河も計画され、喜望峰を回らないでも東方へ向かえるようになると、地理的条件の変化が出てきたこと。

経済的には、この時期、ヨーロッパに

杉山　スマトラの北端から太平洋、オーストラリア沿岸までをカバーしていく

——南北戦争により綿の輸入ができなくなりして、アジアの生糸もインドの綿の直輸入が必要になってきたこと

現地の石炭を使用することはなかったのでしようか。

杉山 一つの貯炭所の貯炭量が決まっているのですが、全部を本国から輸送していくところ、一部を本国から輸送し残りを現地のもので賄うところ、全部を現地で補給するところと分かれています。

——本国から全部を輸送してくる重要な拠点はどこになりますか。

杉山 まず司令部のある香港、それから横浜、長崎もそうです。次のレベルがシンガポール、アモイ、上海、ラブアンなどです。

——優先順位のもととなるのは、戦略上の拠点ということですか、それとも経済的関心のあるところですか。

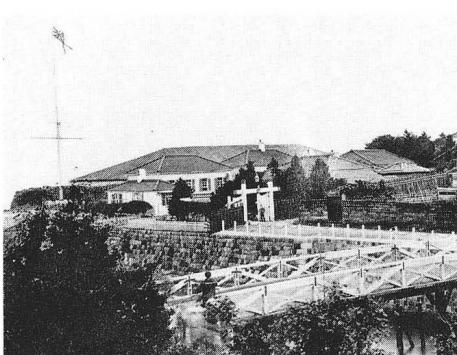
杉山 戰略的拠点として大きいところです。しかし、実際に戦争が始まつた時に使えるのは、イギリスの領土である香港、シンガポール、ラブアンということになります。

——日本ないし中国の石炭の質はどう程度なのでしょうか。

杉山 日本の高島炭は良質です。そこで、六〇年代の緊縮財政下では、本国からの輸送コストもかさむので、使われる石炭があれば現地のものに切り替えようになります。七〇～八〇年代にかけて、高島、三池などの石炭を実際にたかせて調査したという資料があります。中国では、十九世紀終わり頃に開港(カイピエン)炭田が開発され、日本の石炭も影響を受けるようになります。この頃日本の高島炭は東アジア

で最良質の石炭で、ウェーレズ炭と混ぜて使われていました。あとはコーキン炭とトニンキン炭という露天掘りの良好な石炭があり、フランス海軍が使っています。

——上海の地図の領事館敷地に貯炭所が描かれていますが、横浜も谷戸橋のそばに、海軍物置所と呼ばれた貯炭所がありました。



イギリス海軍物置所

そのまま使わずにおくと、風化してしまって、民間に放出し常に品質の良いものに入れ替えていきます。

——一般市場に放出されるとなると、日本の石炭も大きな影響を受けました。

杉山 詳しくは別の機会に譲りますが、日本で、海軍の船は一年に何回ぐら

い航海をしていると思いますか。

杉山 それくらいでよいですか。

三〇〇日近くは、港に碇泊していることがあります。

——今回の展示では、ただ今の港に碇泊している間の兵士の生活についても考えてみました。軍隊生活というのは、

戦後世代のものにとっては、なかなか理解しづらいところがありますね。

杉山 水兵は、休養娛樂のために上陸しても、寝る時は艦に戻ってくるので

はないですか。

——横浜に外国の陸軍部隊が上陸したのは一八六三年七月頃、フランスのアルジェリア兵が初めてとされています。

その前には、各国から公使館付きの騎馬護衛兵が數十人づきていける程度です。

——貯炭量は有事に備えたものということがあります。このように、平穏な時に

は、船の着けやすいところというのも、貯炭所敷地の条件になりますね。

杉山 一番良い場所を占めていますね。

杉山 それと船の着けやすいところというのも、貯炭所敷地の条件になりますね。

——貯炭量は有事に備えたものということがあります。このように、平穏な時に

は、船の着けやすいところというのも、貯炭所敷地の条件になりますね。

杉山 イギリス陸軍の駐屯開始は、翌年でしたね。

——一八六四年一月、第二〇連隊の第

二大隊分遣隊が、香港から横浜に到着

し、現在「港の見える丘公園」と呼ば

れている一帯(山手一～五番)に陣営

を構えました。このあたりが英語のトウ

ウェンティ(トウ)がなまって「トウ

ンテ」山と呼ばれるようになったそう

です。ところで、一八六五年の香港駐屯中のイギリス陸軍第九連隊と十一連隊の人数と、そのうちの死亡・傷病者を表(次頁)にしてみました。

杉山 なかなかおもしろい資料ですね。それと死亡・傷病者の比率もずいぶん高いですね。

——この第九連隊と第十一連隊も、横浜にやつて来るのですが、夫人や子供を連れてきていますし、病人も多く精銳部隊の進駐には、ほど遠いです。一八六五年頃はコレラやマラリアが流行していた時ですし、第九連隊と第十一連隊も病気静養が主目的の一つだったようと思われます。

杉山 東アジア地域は、湿気が多く暑くて気候が良くないですからね。軍隊における衛生問題というのは、石炭と同様に重要な事ですね。

——東アジア地域における部隊の移動は、衛生問題の解決を念頭において行なっているシンがあります。香港の第二〇連隊の場合には、ほとんどが傷病兵でした。香港島から将校と兵士がまことに重要な事ですね。

杉山 東アジア地域は、湿気が多く暑くて気候が良くないですからね。軍隊における衛生問題というのは、石炭と同様に重要な事ですね。

香港駐屯軍の死亡・傷病者数

第9連隊第2大隊

-1865年2月7日(香港到着日)～10月13日；8ヶ月間-

	人員(A)	死亡(B)	病氣・怪我(C)	B/A	C/A	B+C/A
将校	34	1		3%	3%	6%
兵士	839	36	78	4%	9%	14%
女性	47	5	20	11%	43%	53%
子供	79	23	29	29%	38%	66%
合計	999	65	128	7%	13%	19%

第11連隊第2大隊

-1865年5月29日～10月13日；4ヶ月半-

	人員(A)	死亡(B)	病氣・怪我(C)	B/A	C/A	B+C/A
将校	25	2	3	8%	12%	20%
兵士	704	49	124	7%	18%	25%
女性	54	3	16	6%	30%	35%
子供	92	48	14	52%	30%	67%
合計	875	102	157	12%	18%	30%

出典 Irish University Press Area Studies Series
British Parliamentary Papers, CHINA 27,
Correspondence, dispatches returns and
other papers respecting British military affairs
in China 1840～69, p. 346～347

多くの兵士を上陸させ、訓練をやつてなかつたでしようから、艦船がやってきて、軍隊が上陸してくれば、威圧感は抱いたでしようね。

実態と違ったイメージで、事を有利に運ぼうとするのは、パーカスの得意とするやり方でしようか。

杉山 必ずしもパーカスだけでなく、一九世紀後半のイギリスの外交政策には、同様なことがありました。イメージと実態が乖離し始めていたのですが、うまく從来のイメージを使って外交を進めています。一口でいうと老練な外交をやっていたのですが、八〇～九〇年代にドイツなどがイギリスに対立するようになると、イギリスの力がそれ程でないということが分かるようになります。

——ところで、幕府の直轄部隊として横浜警備にやってきた八王子千人同心が、その時見聞した外国の立派な軍隊に対するあこがれや、横浜での生活について書き残しています。今度の展示では、コーナーを設けて取り上げることにしました。

杉山 八王子千人同心の起源は、かなり古いのですか。

——ええ、徳川家康が武田氏・後北条氏の遺臣を召し抱え、八王子周辺に配

たり行進をしたりしていますから、幕府にとっては衝撃は大きかったと思います。一方で幕府は、文久二年(一八六二)に軍制改革を行なって、軍隊の洋式化を図っていますから、大いに参考にしたと思います。

——ところで、幕府の直轄部隊として横浜警備にやってきた八王子千人同心が、その時見聞した外国の立派な軍隊に対するあこがれや、横浜での生活について書き残しています。今度の展示では、コーナーを設けて取り上げることにしました。

杉山 八王子千人同心の起源は、かな

——ところで、幕府の直轄部隊として横浜警備にやってきた八王子千人同心が、その時見聞した外国の立派な軍隊に対するあこがれや、横浜での生活について書き残しています。今度の展示では、コーナーを設けて取り上げることにしました。

杉山 英仏軍の駐屯は、一八六二年の生麦事件を契機として始まりますが、どうかわかりません。

——ところで、幕府の直轄部隊として横浜警備にやってきた八王子千人同心が、その時見聞した外国の立派な軍隊に対するあこがれや、横浜での生活について書き残しています。今度の展示では、コーナーを設けて取り上げることにしました。

杉山 英仏軍の駐屯は、一八六二年の生麦事件を契機として始まりますが、もう一つの直接的な事件が、翌年の薩英戦争と六四年の下関戦争でした。両戦争は、イギリスの力による最後の砲艦外交だったといえますし、海軍の近代化への転機になつているという点で非常に意味があります。両戦争では、アームストロング砲が試験的に用いられていて、砲艦外交という遅れた部分と近代的な兵器の使用という進んだところがミックスしているといえます。

——薩英戦争ではアームストロング砲の使用は、失敗に終つたのでしたね。

杉山 失敗したのは、砲が艦にたいして大きすぎ、一回発射するたびに艦体

——薩英戦争ではアームストロング砲の使用は、失敗に終つたのでしたね。

杉山 失敗したのは、砲が艦にたいして大きすぎ、一回発射するたびに艦体

が大きく揺れ、照準を合わせ直すのに時間がかかったからといわれています。この時期イギリスが脅威と見ていましたのは、フランスではなくドイツになつていました。フランスは、燃料の石炭をトンキンでしか補給できないのにたいへん、十九世紀末にはドイツの船舶数の増大は著しかった。ただ、ドイツの石炭補給線が確立していなかつたので、対抗する力はまだありませんでした。

——軍隊の食糧・衣類などの補給はどう調達していたのでしょうか。駐屯軍の数は居留民に比べて圧倒的に多かったですですが、軍需品の調達は、貿易品の扱いにはならないのでしょうか。

杉山 軍の物資は税関を通りませんから、貿易統計としては出てこないと思います。軍側の資料を調べれば出てくるでしょ。

——石炭の場合はどうだったのでしょうか。

杉山 石炭は輸出入統計に数字が出ています。契約した民間の商船が輸送してきていて、税関を通っているからですから、これからは軍需品などにも目を向けた研究が必要になつてくるでしょう。駐屯していた軍隊の数は、居住民数をはるかに上まわっていたわけですから、これからは軍需品などにも目を向けた研究が必要になつてくるでしょう。

——本日は長時間、ありがとうございました。

伊藤泉美があたりました。

(十二月二十二日横浜開港資料館にて。聞き手は館員の吉良芳恵、中武香奈美、



図2



図1

長島 弘氏 寄贈

震災直後のパノラマ写真

大正十二（一九二三）年の関東大震災による被害の記録写真是刊行物を含めれば数多く遺されてはいるが、横浜の中心部である関内地区を鳥瞰するものということになると、山手や野毛からの遠望写真を除けば管見する限り皆無といってよい。

このたび、大阪府松原市在住の長島弘氏より当資料館に寄贈された四枚一组のパノラマ写真（図①～④）はこの欠落を埋める貴重な歴史資料といえる。長島氏は明治三十四（一九〇一）年浦賀の生まれ、震災当时は〈横浜税関監吏〉で、大桟橋上で大地震に遭遇して九死に一生を得た関東大震災の生証人である（長島弘述『牛歩八十五年』昭和六十一年刊）。このパノラマ写真的撮影地点は、現中区日本大通十二番地NTT横浜情報案内センタ所在地に震災時新築中で倒壊を免れた横浜中央電話局舎の楼上と考へて間違いない。撮影時期は、瓦礫の整理が進んでいないことから、さほど時間が経つてないとは思えない。長島氏は大正十二年十一月には神戸税関に出向しているのでその時までには入手していたのである。おそらく、横浜税関が管轄区域の被災状況を一覧するため撮影した公的な記録写真と推測される。

図②は、旧居留地の二子町・角町一帯であるが、瓦礫が積畳していく通りの位置さえ識別できない状態にある。中央左寄りの瓦礫が取除けられて整序された地所は山下町二番地、水町通り沿いに階段付の基礎を遺しているのは香港上海銀行（ダイアック設計 明治二十一年竣工）跡である。

図③の中央で二棟のバラックをもつ



図7

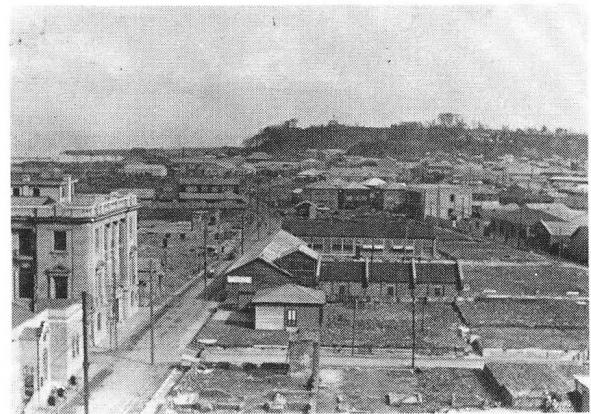


図6

図①は、メインストリートである本町通りの東方、山下町（旧居留地）側を見る。写真中央で、火害に遭いながらも厳然として残存している三階建ビルは山下町五十二番地の露亞銀行、現警友病院別館である。その右奥の壁体を遺した建物は五十四番地のイリス商会（デ・ランデ設計 明治四十一年竣工）、さらにその奥で切妻の壁体をさらしているのが六十四番地のケリー・ウォルシュ商会（コンドル設計 明治三十一年竣工）である。また、写真の左上方、フランス波止場の報時球の下方で、骨組を遺して屋根を消失した二階建がみえるが、この建物は正面玄関部分が戸田平和記念館として現存している海岸通七番地のバターフィールド・アンド・スワイヤー商会（大正十一年竣工）である。



図4



図3

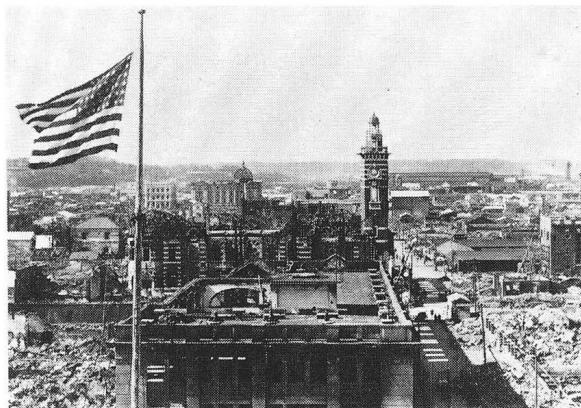


図5

図④は、左下間に当資料館の敷地にあたるイギリス領事館跡を収めている。中央右寄りに館宝ともいいうべき「玉楠」の残存状態がはっきりと示されている。左上方は新港埠頭、赤煉瓦一号倉庫がみえる。

(良)

図⑤は、県庁部分の一カットを挟んで図④と連続するのかもしれない。町通りを隔てた手前は二十一番地で太平洋郵船会社が社旗を掲げている。左上方は陸地と切断された状態の大桟橋である。中央の市電は動いているのであろうか。線路上には未だ瓦礫が散乱している。とすれば、震災当日から放置されたままなのだろうか。

図④は、左下間に当資料館の敷地にあたるイギリス領事館跡を収めている。中央右寄りに館宝ともいいうべき「玉楠」の残存状態がはっきりと示されている。左上方は新港埠頭、赤煉瓦一号倉庫がみえる。

左上方は陸地と切断された状態の大桟橋である。中央の市電は動いているのであろうか。線路上には未だ瓦礫が散乱している。とすれば、震災当日から放置されたままなのだろうか。

図⑤は、県庁部分の一カットを挟んで図④と連続するのかもしれない。町通りを隔てた手前は二十一番地で太平洋郵船会社が社旗を掲げている。左上方は陸地と切断された状態の大桟橋である。中央の市電は動いているのであろうか。線路上には未だ瓦礫が散乱している。とすれば、震災当日から放置されたままなのだろうか。



図9

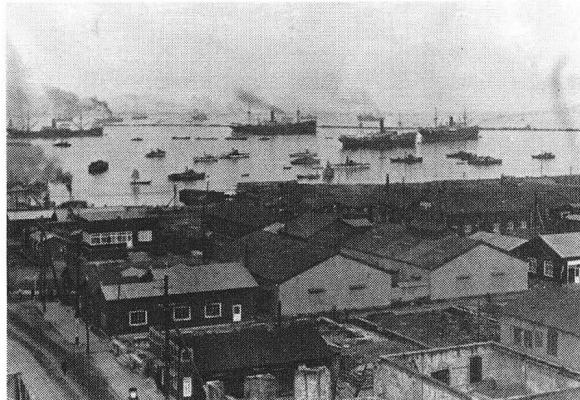


図8

外国商館の日本人番頭（その2）

外国商館の番頭たち

前回みたように、遅くとも一八九〇（明治三三）年頃までには、市中の日々の生糸取引の現場は、生糸問屋と外国商館に分かれて所属する日本人番頭が活躍する場であった。

実際、小林綾太郎『横浜蚕糸貿易事情』の付録の表から抜粋した第1表によれば、生糸を取り扱った外国商館のほとんどが、生糸購入係として日本人番頭を雇用していたことがわかる。

藤本実也『開港と生糸貿易』中巻第4章は、執筆当時（昭和一〇年代初頭）の調査にもとづき、外国商館の日本人番頭の一部について、記している。そ

の中で、今まで掲げた図表に登場し、比較的、経歴のはつきりしているのは、次のような人々である。

①二〇九番館の平井保五郎

一八五三年江戸に生、一九一八年歿。

一八七〇年（正確には「明治三年」、一七歳頃）に、バビエル商会に入り、肩

糸部買入主任となり、関東大震災での同商会解散まで五四年間勤続。商館番

頭として著名。その長男・次男も商館

や横浜商人の店に勤務（同書三〇八

頁）。

②二〇九番館の三堀武藏

一八五八年頃生、一九二六年歿。上

州下仁田出身。「早くより横浜に来つて」九一番館に入る。五三年間勤続し、

肩糸業界で著名。勤続年数と歴年から、

九一番館入りは一八七三年（二十五歳頃）

以前と推定される（同書三三〇頁）。

③甲九〇番館の西宮大助・吉田鈴之助

一八五八年仙台に生。一八八四年に

横浜に出て、高島学校入学、なお英語

を学び、シカゴ商業学校に留学。一八八〇年に帰国し、八二年（二六歳頃）に英一番館に入る。同商会に重きをなすのみならず、横浜外国商館中声明を馳せた（同書二七二頁）。

西宮大助は、一八四四年（正確には「弘化元年」）生、一九〇七年歿。東京人で甲九〇番館の輸入品部主任を勤めた。

その実子、鈴之助は一八六四年生。一八八二年（一八歳頃）に甲九〇番館に入店、輸出生糸部主任を勤め重きをなし、一九二八年退社、勤続六年間。

鈴之助の長男の五郎も慶大卒業後、同店に入店し、また鈴之助実弟田中鑑次郎も同店に勤務し、父子三代の雇用となつた（同書三一六頁）。

④乙九〇番館の岩間良助

一八五三年江戸に生、一九一八年歿。

一八五八年江戸に生、一九一九年歿。

一八六七年（正確には「慶応三年」）に横浜に来り芝屋の店に入り、田口太

七と共に上州奥州などに出張して生糸

の買入れにあたる。一八八〇年、貿易

会（直輸出商社）へ入社し、五年後、

社長の引退と共に退社。岩崎弥三郎と

⑤一番館の大友頼幸

一八五六六年仙台に生。一八八四年に

横浜に出て、高島学校入学、なお英語

を学び、シカゴ商業学校に留学。一八

八〇年に帰国し、八二年（二六歳頃）

に英一番館に入る。同商会に重きをなすのみならず、横浜外国商館中声明を

馳せた（同書二七二頁）。

これらの少ない例を見ても、商館日

本人番頭の出現には、時代的に二つの

タイプがあることがわかる。（1）や（2）の

場合は、商館入店の年齢が比較的の低く、

したがって、低い地位で雇われ、やが

て番頭の地位を獲得したものであろう。

（4）（5）の場合は、ある程度の経験を経て、成人してから商館入りして番頭になつている。もっとも、（5）の場合は、

当初は通訳として雇われたようだ（前

回の第2図参照）。

また、これらの商館番頭の勤続年数

が長く、親族に商館勤務者が多い事実

は、少なくとも明治中期以降の商館勤

務の日本人の地位が比較的高く安定し

ていたことを推測させる。

（1）（2）など早い時期の雇用に関して言

うと、外国商館の日本人雇用が、開港

後すぐに一般化したことは明らかであ

る。同書一八五頁以下が引用している

共に、上州の下村善右衛門の横浜出張店（原商店内的一部借り入れ）に勤務。
一八八七年（二九歳頃）、乙九〇番館に招聘せられ、生糸買入主任として重きをなし、一九一四年退社、勤続二七年間。その長男、次男も商館勤務（同書三二一頁）。

棕原 素
(むくはら はじめ 一八四七～一九〇〇)



〔追記〕

脱稿後、来館された芦屋市の棕原武男氏（一五代当主）から掲載写真

を提供して頂いた。その御教示によれば、第1表などに三番館の館員と

して名前の見える棕原素の略歴は次

のとおり。彦根藩士一〇代棕原正意

の九男として生。一八七六年、彦根

から横浜北仲通三丁目二六に移転。

英一番館ジャーディン・マセソン商

会番頭（生糸選別のエキスパート）

を経て独立し、貿易・鉱山業などを

經營。英國人から購入した掃部山の

洋館に住んでいた頃は、請願巡回を

置き、一人曳き人力車で出勤し、

「掃部山の棕原さん」と呼ばれた。

現在、高野山の墓地の棕原素の墓は、

左右田家・茂木家と並んでいるとい

う。第2図で棕原素は三番館ロビン

ソ商会に属しているが、英一番館から移ったものか。あらためて棕原武男氏への謝意を表する次第である。

第1表 生糸を取扱う外国商館と日本人番頭(1890年頃)

商館番号	企業名	生糸購入担当の番頭名
1番館	ヨーディン・マゼン社	矢野半次郎
2番館	イリス商会	天田周八
3番館	カーリン・エンド・ピッソ商会	椋原素・北村吟行
6番館	ワインレ・リチャードソン商会	(委託買=番頭なし)
22番館	ミッドルトン商会	(委託買=番頭なし)
33番館	モリ・ハイマン商会	椎津安兵衛
36番館	アダムソンベル商会	(委託買=番頭なし)
47番館	ジグラール商会	松浦嘉兵衛(糸)、居作兼次郎(屑)
71番館	カーラ・エー・ル・ストン商会	仲丸芳蔵
角89番館	有限責任日中貿易商会	(委託買=番頭なし)
中89番館	グリフォン商会	柳雲從(中国人)
甲90番館	シーベル・エンド・カルウォルト商会	吉田鈴之助(糸)、加納勇次郎(屑)
乙90番館	シーベル商会	岩間良助
91番館	デロオロ商会	青木角蔵・三堀武蔵(糸)、小林角次郎(屑)
95番館	ナホム・エンド・オーソンガル商会	田口源蔵、安藤鉄次郎
甲164番館	ピー・ドリーウ商会	竹原良助
乙164番館	エル・グーユーリ商会	橋本徳兵衛
168番館	ヴィバンテ商会	関根万吉(糸)、加賀見綱平(屑)
177番館	ショーネ・モチュー商会	水見喜兵衛
193番館	キンド・エンド・ジバ商会	松本幸七
198番館	ポール・ハイネマン商会	平林岩次郎
206番館	ジロード商会	平形房吉
209番館	バビエル商会	鈴木与七(糸)、平井保五郎(屑)
216番館	フレザー・フラー商会	メリガリー

資料) 小林前掲書卷末付表「現今生糸屑物買入商館及ビ買入方番頭姓名」。ただし、原表から屑物専業と思われるものを省いた。

文久二年出版の『珍事五ヶ国横浜はなし』の中の外国商館リストでも、ほとんどの商館に日本人の「小使」「藏番」「別当」「馬丁」の名がみられる。

ディレクトリーの日本人記載

さて、日本人が外国商館の番頭として雇われるようになつたのは、いつごろからのことだろうか。

まず、第1表とディレクトリーを突

き合わせてみた。一八九〇年頃の主な生糸取扱商館である第1表の二四店の日本人店員について、一八九〇年版、一八九三年版のディレクトリーで確かめてみると、第2表のようになる。

第2表の一八九〇年版の欄に「委託

買」と記したのは、第1表に示したように、小林書で「委託買ヲ為ス故、番頭ナシ」とされているものである。これらは、横浜の生糸問屋か

第2表 ジャパン・ディレクトリー記載の日本人店員(生糸取扱商館のみ)

居留地 地番	商館・商人名	ディレクトリー記載の日本人店員	
		1890年版	1893年版
1	Jardine, Matheson & Co.		
2-B	Ulysse Pila & Co.		
3	Wilkin & Robison	Hadano, Niki (委託買)	Hadano, Niki, Mukuhara, Gin?
6	Findlay, Richardson & Co.	Kasahara (委託買)	Kasahara
22	Middleton & Co.		
35	Mourilyan, Heimann & Co.		
36	Adamson, Bell & Co.	(委託買)	
47	Ziegler & Merian		
71	W. M. Strachan & Co.		
89-C	China and Japan Trading Co., Ltd.	(委託買)	
89	Griffin & Co.	Nammo, Yoshiga	Misawa, Yoshiga
90	Siber and Brennwald		
90-B	Sieber & Co.		
91	Dell' Oro & Co.		
95	Nabholz & Osenbruggen		
164-B	P. Dourille		
164-B	L. Gouilloud (1891年版で93-D)	Takehama	
168-B	Vivant Brothers		
177	Schoene & Mottu		
193	Kingdon, Schwabe & Co.		
198	Paul Heinemann & Co.		
(206)	Marius Giraud & Co. H)*		
209	Bavier & Co.		
216	Fraser, Farley & Co.	(日本人番頭なし)	

資料) The Japan Directory (Japan Gazette 社発行、1890年版、1891年版)、および第1表。

注) 第1表の外国商館のみを対象とし、その日本人と思われる人名の姓のみを記した。「

委託買」と記したもののは第1表で「委託買」とされているもの。

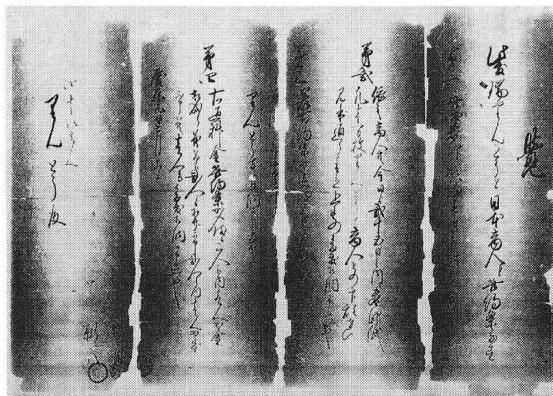
* 第1表では「ジロード商会」となっている206番は、1890年版では欠番で、1891年版ではこの表に記したようになっている。逆に第1表で「ポール・ハイネマン商会」となっている198番は、1890年版にはあるが、1891年版にはない。

ら直接に生糸を購入せず、他の仲買専門の外国商人から生糸を購入し輸出していた。いっぽう仲買専門の外国商人は、生糸問屋から生糸を購入するが、みずからはほとんど輸出せず、購入した生糸を他の外国商館に販売していた。

この「委託買」の商館以外は、生糸問屋からの生糸購入を担当する番頭を置いていた。第1表によれば、二二六番館と(中)八九番館グリフォン商会

の番頭は外国人であったが、それ以外は、日本人であった。つまり、第2表の八九〇年版の欄が空欄になつていて、前述のよう、もっと地位の低い雇用者は、ディレクトリーでは全員無視されれているであろう。

にもかかわらず、ディレクトリーには全くそれが記されていないのである。前述のよう、もっと地位の低い雇用者は、ディレクトリーでは全員無視されれているであろう。



『横浜成功名鑑』⁽¹⁾に、「神奈川随一大呉服店茅木屋は数百年以来の名家にして、主人太田佐兵衛君は快活なる老紳士なり」という記述がある。甲州屋忠右衛門筆記「御拝借地所御願済渡世合写」⁽²⁾によると、茅木屋は安政六年(一八五九)五月二八日にはすでに、横浜町二丁目大通りに面する百坪の土地を借地している。取扱品目は呉服・太物等の織維製品、店支配人は銀次郎であった。

一 横浜商人の没落

茅木屋銀次郎

29

その太田佐兵衛の手元にあった筈の文書の一部が当館に収蔵されている。そのなかには、「大正拾弐年関東震災残焼」と記された被災文書がある。手に取るだけで端がボロボロ崩れてしまふような文書をめくっていくと、横浜店支配人銀次郎らと、スイス商人リンドウとの蚕卵紙の取引に関する次のような契約書が出てきた。

リンドウはパリの文壇で多少は名の文書を著わした。スイス時計商組合から派遣されて安政六年に初来日、元治元年(一八六四)にはスイス領事として横浜に駐在した。その後プロシャン国籍に鞍替えして自らの商会を興し、外国人商業会議所の会頭にもなつた。銀次郎らとリンドウとの契約はどうなつたか。その顛末が、新島金兵衛談話⁽³⁾によつて判明する。それによる

此度瑞里んとうと日本商人と此約条なす第一此度蚕卵紙約定ニ付、里んとうより壹千五百両也、手金□□□商人共□□□渡し□□□但し蚕卵紙壹枚ニ付式未朱也

第三式依之の商人共今日より式十五日之内ニ蚕卵紙凡壹万枚、里んとうと商人との印形を以見本通り相定、上もの急度相納可申者也

第三式若右約条相違致候節は、商人共より此手金返済之外壹千壹□□過料として里んとうの方え相納可申者也第四右過料金此約条加入致候三人之内商人出金相成り兼候ても式人より相弁可申、式人之内商人出金不申候共里んとう急度相納可申者也

被災文書にはこの不祥事の事後処理に関するものも含まれている。まずその年(一八六五)の暮れ、銀次郎が「家風ニ相不叶離縁」となり、その旨が取引先の各問屋に通知される。銀次郎は、安政六年、横浜店を預かるのとほぼ同じ頃、佐兵衛の娘お熊の婿養子となつ

四十八はん
里んとう殿

茅木屋銀治郎
同 新兵衛
同 新八

慶応元丑七月十一日

茅木屋銀治郎

ていたのである。佐兵衛はお熊の将来を考え、翌慶応二年六月、「横浜本町式丁目拝借地並ニ建家御藏共」離縁した銀次郎に譲渡した。しかし、三年一〇月には銀次郎がお熊を離縁、四年中には石川屋銀次郎の名義で再起を期したらしいが、八七〇両余の借金返済が滞り、「家作並ニ売込株」とも信濃

屋又兵衛の手に渡ってしまった。明治五年(一八七二)になつて、銀次郎の実兄小川重光から佐兵衛に一通の手紙が出されている。銀次郎の娘よしの養育を依頼したものである。その頃銀次郎は行方知れずになつていたのであつた。

銀次郎の没落は、逆に横浜商人の成功の条件を照らし出してくれる。それは第一に、外商の前貸金に頼らなくてすむよう豊富な資金の調達能力、第二に大量の集荷と危険の分散をともに可能にする産地荷主との広範で安定的な結びつき、そして第三に有能な人材の確保であろう。

(1)明治四十三年、横浜商況新報社刊。
(2)「横浜商人録」として神奈川県図書館協会編『神奈川県郷土資料集成・開港篇』に収録。

(3)『東京日日新聞』明治二十五年九月一日号掲載、「貿易制度」と題する連載。藤本実也『開港と生糸貿易』中巻五八五六頁に引用がある。

開覧室から

開港期から文明開化期にかけての横浜の町並や風物、外国人の風俗や外国の風景、風物などを題材とした錦絵を

横浜絵といい、利用の多い資料の一つになっています。今回は、横浜絵を集めた図書、雑誌を紹介したいと思います。

○「集成横浜浮世絵」

(神奈川県立博物館編 有隣堂 昭和

五四年二月 A3判 五三(一頁)
全国に散在している横浜絵を出来る限り調査し、掲載すること目的に取材、編集されたもの。多色刷及び単色刷図版のほか、作品解説、論稿、資料などで構成。資料には「絵師別月別発行点数一覧」、「横浜浮世絵年表」などがある。

○「横浜浮世絵」

(横田洋一編 有隣堂 平成元年五月

A4判 七一頁)

一、好奇心の序曲、二、新しさへの憧憬、三、未知への関心、四、開化の足音に分けて多色刷図版を載せ、作品解説をほどこしたもの。一では外国人の肖像、二では横浜の町並や港、外国人

人の生活、三では世界の都市や船、舶來事始め、四では鉄道や鉄の橋等の新名所などをとりあげている。最後に「横浜浮世絵の世界」がある。

○「市民グラフヨコハマ No.68 みる横浜」

(横浜市市民局市民情報室広報センター

編・発行 一九八九年六月 B4判

九六貞)

I港と船、II街と人、III異人風俗、IV鉄道開業、V横浜名所に分けて多色刷図版を掲載、それぞれに解説を付けている。

○「たまくす 第三号 特集 横浜開港名所図会—錦絵に見る横浜の賑わい」

(上田 由美)

I港と船、II街と人、III異人風俗、IV鉄道開業、V横浜名所に分けて多色刷図版を掲載、それぞれに解説を付けている。

○「たまくす 第三号 特集 横浜開港名所図会—錦絵に見る横浜の賑わい」

(上田 由美)

以上の6項目であります。

このほか、当館所蔵の横浜絵を、作者別に集めた情報ファイルがあります。

ご利用ください。

(上田 由美)

ラントンの関係施設あるいは事業は、

次の6項目でした。

このほか、当館所蔵の横浜絵を、作者

別に集めた情報ファイルがあります。

ご利用ください。

(上田 由美)

資料館だより

▼展示

- (1) 「幕末の横浜山手ートワントン山とフランス山—英仏駐屯軍の四千二百日」
1／29～4／26 英仏軍隊は、生麦

- 事件を契機に一八六三年から十二年間、居留民保護・居留地防衛のため横浜の山手に駐屯することになった。英仏の

- アジア政策と日本政府の対応、外國軍

- 隊駐留の実態と横浜への影響、日本の軍制改革への影響、撤退と日本の主権回復など、さまざま面から英仏駐屯

- 軍の実像を紹介する。

- (2) 「幕末の遠国奉行たち」(仮題)

- 4／29～8／2 幕末という時代は、日本が国際社会の一員として歩み始め

た時代であった。この激動の時代にあって日本の外交と海防を支えた人々に幕府の「遠国奉行」たちがいた。展示では、長崎・新潟・浦賀・下田・箱館・神奈川などに置かれた「遠国奉行」たちの活動を紹介する。

▼講座

- (1) 「トワントン山とフランス山」展開催記念講座 2／29から3／28の毎週土曜 全五回

- 展示のもととなる資料を素材として、幕末期、攘夷の激化により駐屯した外國軍隊の実態、開港場や政府との関係などを明らかにする。

- 講師等詳細未定

▼寄贈資料

- (1) 横浜館プログラムほか映画館関係資料 八点(東京都江戸川区 関根八郎氏)

（財）横浜開港資料普及協会・横浜開港資料館編・発行 A4判 三四貞
浮世絵師五雲亭貞秀が鳳来堂から出版した『横浜土産』の特集。貞秀の作品は、開港期の横浜の空明気を伝えるのみならず、歴史資料としての価値も高いといわれている。多色刷図版のほか、証文、「横浜今昔対照地図」、「横浜百周年・開港百三十周年記念 錦絵にみる横浜」

以上の6項目であります。

このほか、当館所蔵の横浜絵を、作者別に集めた情報ファイルがあります。

ご利用ください。

(上田 由美)

以上の6項目であります。

このほか、当館所蔵の横浜絵を、作者

別に集めた情報ファイルがあります。

ご利用ください。

(上田 由美)